

幼児の関係性攻撃及び外顯的攻撃による被害と 孤独感との関連¹⁾

畠山美穂
鳥取短期大学 (非常勤講師)

山崎 晃
広島大学大学院

本研究の目的は、仲間による攻撃被害のタイプによって孤独感に違いが見られるか (研究1)、また、攻撃被害のタイプによって被害者の仲間との相互作用の質にどのような違いが見られるのかについて明らかにすることである (研究2)。研究1では、5歳児126名の孤独感得点及び攻撃による被害得点を測定した。クラスター分析の結果、関係性攻撃被害得点及び外顯的攻撃被害得点の高低に特徴づけられる4つのクラスター (外顯高群、関係高群、両高群、両低群) を採用した。4つの群の孤独感得点に違いが見られるのかについて検討した結果、両高群と関係高群が外顯高群や両低群と比較して孤独感が高いことが示された。また、研究2では、4つの群で仲間との相互作用にどのような違いが見られるのかについて検討した。BORと呼ばれる行動観察記録法を用いて観察記録を分析した結果、関係高群は仲間との相互作用において不自然な応答が多いことが示された。

キーワード：幼児、関係性攻撃被害、外顯的攻撃被害、孤独感、BOR

問 題

孤独感とは、「個人の社会的関係のネットワークに重大な欠損が生じた場合に生起する主観的な不快感情」(Perlman & Peplau, 1981)であり、他者との関係性における願望レベルと現実レベルに差が生じた場合に引き起こされる (Peplau & Perlman, 1982) と定義されている。また、孤独感とは、親から心理的に独立する青年期までは感じないと考えられてきた (Weiss, 1973) ため、子どもの孤独感に関する研究は青年や大人を対象とした研究と較べて少ない。

ところが、近年、子どもを対象とした孤独感に関する研究がいくつか行われ、青年期以前には孤独感を感じないのではなく、発達段階に応じて孤

独感の意味合いが異なることが指摘された (Cassidy & Asher, 1992; 落合, 1999)。落合 (1999) は、児童期の孤独感とは疎外感に近い感情であるが、青年期になると疎外感の他に自己嫌悪感、不安感、劣等感にも近い感情になることを示している。Cassidy & Asher (1992) の研究では、幼稚園児から小学校1年生 (5歳~7歳) の子どもを対象に、「孤独感の意味を知っているか」「何が孤独感の原因であるのか」などについて質問した結果、多くの対象児が孤独の意味を「独りぼっち」で「悲しい」と理解しており、「物理的に独りぼっちになった際に生じる不快感情」として捉えていることが示された。孤独感を抱えた幼児は引っ込み思案傾向が強く (Cassidy & Asher, 1992)、それがさらなる仲間からの孤立を生むといった悪循環に陥る場合が少なくない。仲間関係は子どもの社会的スキルや知識を身につける上で重要な機会であるため、幼児期に孤独感を抱えることは社会的スキルや知

1) 本研究のデータ収集にあたり、ご協力いただきました園の先生方ならびに園児の皆様に深く感謝申し上げます。

識の獲得が阻害され、将来にわたる社会的不適応とも関連する可能性も危惧される。こうした後年のリスクを予防するためにも、幼児期の孤独感について詳細に検討する必要がある。

これまでの研究では、このような幼児に対してトレーナーの介入によって社会的スキルの獲得を促す方法が用いられてきた（佐藤・佐藤・高山, 1993）。しかし、日常の保育場面においてこのような介入が得られることは極めてまれであり、一般にこのような幼児に対する対応は保育者が担っている。従って、孤独感を抱えた幼児の日常場面での他者との相互作用や行動特徴を理解し、それに対する適切な保育者の働きかけを考察する必要がある。

孤独感と関連する重要な要因として仲間による攻撃の被害が挙げられている（Boulton & Underwood, 1992; Perry, Kusel & Perry, 1988 など）。これらの先行研究では、攻撃被害を受けた児童は被害を受けていない児童と比較して孤独感が高いことが示され、攻撃被害が子どもの孤独感を説明する重要な要因の1つであることを示唆している。Crick & Grotpeter (1996) は、小学校3年生から6年生までの児童を対象として、攻撃行動を叩く・蹴るなどの外顯的攻撃と「遊びグループから仲間を排斥する」、「仲間がその子どもを嫌うようにしむける」等、仲間関係を絶つことによって相手を傷つける関係性攻撃の2つに分類し孤独感との関連を検討した。その結果、どちらの攻撃を受けた児童も孤独感が高いことが明らかにされた。

一方、3歳から5歳までの幼児を対象としたCrick, Casas & Ku (1999) は、保育者評定により測定された2つの攻撃被害と自己報告形式により測定された孤独感との関連を検討した。その結果、2つの攻撃被害と孤独感とは関連しないことが示された。これらの結果は、攻撃被害が孤独感と関連するのは児童期以降であることを示唆するものである。しかし、Crick et al. (1999) の研究には以下に示す問題点がある。第1に、3歳から5歳ま

での幼児を対象としていたため、Cassidy & Asher (1992) によって示された、孤独感を理解するとされた年齢（5歳）を下回る幼児が多く含まれていた点である。孤独感は、仲間関係が閉ざされること、すなわち、関係性攻撃による被害との関連が深いと予測されるが、関係性攻撃がみられるのは5歳以降である（畠山・山崎, 2002）ことから、5歳児未満の幼児は孤独感を抱えにくいと予測される。従って、Crick et al. (1999) の研究において攻撃被害と孤独感との関連が見出されなかったのは、関係性攻撃を受けず孤独感を感じない3・4歳児と関係性攻撃を受け孤独感を感じている5歳児を一括して分析したために結果が相殺されたためであると考えられる。

第2に、Crick et al. (1999) の研究では、対象者をどのような攻撃を受けやすいのかによってタイプ分けせずに分析していた点である。そのため、どのタイプの攻撃被害が孤独感を高めるかについては不明である。外顯的攻撃は1名の加害者から1名の被害者に対して単発的に行われやすいのに対し、関係性攻撃は複数の加害者から1名の被害者に対して継続的に行われる場合が多い（畠山・山崎, 2002, 2003）ことから、関係性攻撃の被害者は外顯的攻撃の被害者と比較して孤独感が高いと予測される。攻撃被害のタイプによる孤独感の違いを明らかにすることができれば、どのような攻撃が幼児にとってより深刻な孤独感をもたらすのかを理解することができる。従って、研究1では5歳児を対象に攻撃被害のタイプによって孤独感に違いが見られるかを明らかにすることを目的とする。

さて、これまで述べてきたように、仲間による攻撃が子どもの孤独感と関連することが明らかにされてきたが、攻撃され孤独感が高い幼児は幼稚園での日常生活において、仲間とどのように関わっているのだろうか。畠山・山崎 (2003) は、攻撃を受ける幼児は仲間から孤立していることを示している。孤独感という感情が仲間関係の欠如

によってもたらされる (Perlman & Peplau, 1981) ことから、攻撃被害を受けて孤独感の高い幼児は、仲間に対する働きかけや仲間からの働きかけが少ないと考えられる。

しかし、単に相互作用の量的欠如だけが孤独感と関連するとは言えない可能性があることが指摘され (Dodge, 1983)、相互作用の量的な側面ばかりではなく質的側面に注目する必要があると考えられる。相互作用の質的側面とは、幼児が仲間に対してどのような働きかけを行い、それに対して相手がどのように反応したのかを指し、これまでの研究においてこの点を詳細に分析した研究は見られない。これを明らかにすることによって、攻撃被害を受け孤独感が高い幼児の行動特徴が理解でき、彼らがどうすれば孤独感を低減させられるのか、さらに、このような幼児に対する保育者の適切な対応が考察できると考えられる。そこで、研究2では、攻撃被害のタイプによって仲間との相互作用にどのような違いが見られるのかについて、量的・質的分析から明らかにすることを目的とする。

研究1

方法

孤独感の査定

対象児 幼稚園年長組4クラス126名(平均年齢5歳5ヶ月;男児64名,女児62名)

材料 前田(1995)で使用された孤独感尺度11項目(項目例:「幼稚園ではお友だちがいなくて寂しいですか?」「幼稚園で一人ぼっちだと思いますか?」など)を用いた。

手続き 幼児に幼稚園での孤独感の質問項目について個人面接法を用いて質問し、3件法(悲しい顔の図版【孤独感を感じていると回答する場合に選択】を選択した場合に3点,笑顔の図版【孤独感を感じていないと回答する場合に選択】を選択した場合に1点,無表情の図版【どちらでもない場合に選択】を選択した場合に2点)で尋ねた。

具体的な教示としては、例えば「幼稚園でお友だちがいなくて寂しいですか?」の質問に対しては、寂しい【悲しい顔の図版】、寂しくない【笑顔の図版】、どちらでもない【無表情の図版】から回答を選択させた。また、「幼稚園で一人ぼっちだと思いますか?」の場合、独りぼっちだと思う【悲しい顔の図版】、独りぼっちと思わない【笑顔の図版】、どちらでもない【無表情の図版】から回答を選択させた。従って、孤独感得点は11点~33点の範囲にわたり、得点が高いほど孤独感が高いことを意味する。孤独感尺度について α 係数を算出したところ $\alpha=.72$ であり、ある程度高い信頼性が得られた。

攻撃被害の査定

材料 Crick et al. (1999) で作成された Preschool Peer Victimization Measure—Teacher Report (幼児用仲間攻撃被害尺度—教師評定用)を翻訳した尺度を用いた (Table 1)。この尺度は、「仲間からの外顯的攻撃による被害(3項目)」、「仲間からの関係性攻撃による被害(3項目)」、「仲間から向社会的行動を受けられない(3項目)」の3つの下位尺度で構成されるが、向社会的行動に関する下位尺度は本研究の目的と関係する項目ではないので使用しなかった。

手続き 担任保育者4名に担任している幼児について、2つの下位尺度を非常に当てはまる(5点)~全く当てはまらない(1点)までどちらとも

Table 1 外顯的攻撃及び関係性攻撃被害の項目

項目
(外顯的攻撃による被害)
この子どもは仲間からたたかれたり、蹴られたり、つかれたりする
この子どもは、仲間からつかれたり、乱暴に押されたりする
この子どもは、仲間から嫌なあだ名で呼ばれたりする
(関係性攻撃による被害)
仲間がこの子どもに腹を立てると、この子どもは無視される
仲間が腹を立てたり、イライラをぶつけたい時、この子どもは仲間はずれにされる
仲間の希望にそわなければ、この子どもは“友だちじゃない”と言われる

いえない (3) を中点とした 5 件法で評定してもらった。従って、外顯的攻撃による被害及び関係性攻撃による被害の各下位尺度得点はそれぞれ 3 点~15 点の範囲にわたり、得点が高いほどそれぞれの攻撃による被害が高いことを示す。また、各下位尺度について α 係数を算出したところ、外顯的攻撃による被害は $\alpha = .81$ 、関係性攻撃による被害は $\alpha = .85$ であり高い信頼性が得られた。

【倫理的問題の配慮】

孤独感と攻撃被害の査定にあたり、倫理的配慮を行った。まず、攻撃被害であるが、攻撃による被害を自己報告させることは倫理的な問題により困難であると判断し、保育者評定を用いた。孤独感に関しては、保育者による評定が難しいこともあり、幼稚園側と協議した結果、下記の 2 点を行うことを確認した上で調査を実施した。1 点目は、孤独感の質問を行った後に、孤独感が高い (6 項目以上の質問を 3 点と回答した場合) と判断された幼児に対して、「どうすれば寂しい気持ちは小さくなるかな?」と質問し「お友だちに“遊ぼう”とって一緒に遊ぶ」などの回答を得た。また、回答できなかった幼児に対しては、「独りぼっちで寂しい時は“仲間に入れて”とってお友だちと遊ぶと悲しい気持ちが小さくなるよ」などの回答を調査者が提示した。2 点目は、調査終了後に孤独感が高い幼児を保育者に報告し、“声かけを多くする”、“仲間入りをする・攻撃を制止させるなどの自己主張をできるように促す”などの介入をしてもらった。また、孤独感が高く日常場面でも友だちと関わりにくいと保育者が判断した幼児に対しては、保育者から保護者に対してその様子を報告してもらった。

結果・考察

まずはじめに、2 つの攻撃被害得点に性差が見られるかを検討するため、それぞれの攻撃被害得点ごとに性を独立変数とした一要因の分散分析を行った (Table 2)。その結果、外顯的攻撃被害得点に性差が見られ ($F(1, 124) = 27.53, p < .01$)、男児が

Table 2 男女別攻撃被害得点の平均と SD

	外顯的攻撃被害		関係性攻撃被害	
	平均	SD	平均	SD
男児	7.4	2.9	7.5	3.0
女児	5.0	2.2	7.2	2.6

女児よりも得点が高かった。関係性攻撃被害得点に性差は見られなかった。この結果は、Crick et al. (1999) の外顯的攻撃被害は女児よりも男児に多いという結果と一致したものの、関係性攻撃被害は男児よりも女児に多いという結果とは一致しなかった。

また、本来であれば、外顯的攻撃被害得点に性差が見られたため、これ以降の分析は男女別に行うのが望ましいと考えられるが、関係性攻撃被害得点に性差がみられなかったこと、さらに、本研究の主な目的が被害得点のタイプによる孤独感の違いを明らかにすることであることから、これ以降の分析は男女込みにして行った。

2 つの攻撃被害と孤独感との関連を検討するため、外顯的攻撃被害得点及び関係性攻撃被害得点の高低に基づいて幼児の分類を行った。具体的には、2 つの被害得点を用いて K-means 法によるクラスター分析を行った。その結果、外顯的攻撃による被害得点 ($F(3, 122) = 212.3; p < .01$) と関係性攻撃による被害得点 ($F(3, 122) = 178.8; p < .01$) の高低に特徴付けられる 4 つのクラスターを採用した。そこで、各クラスターを、関係性攻撃の被害得点のみが高い群 (関係高群) ($n = 20$: 男児 5, 女児 15)、外顯的攻撃の被害得点のみが高い群 (以下、外顯高群) ($n = 26$: 男児 17, 女児 9)、外顯的攻撃及び関係性攻撃の被害得点が高い群 (以下、両高群) ($n = 34$: 男児 24, 女児 10)、外顯的攻撃及び関係性攻撃の被害得点が高い群 (両低群) ($n = 46$: 男児 18, 女児 28) と命名した。各群の攻撃被害得点を Table 3 に示す。この群を要因として孤独感の違いを検討するため分散分析を行った。その結果、群の主効果が見られ ($F(3, 122) =$

Table 3 群ごとの攻撃被害及び孤独感の平均値と標準偏差

	<i>n</i>	外顕被害平均	<i>SD</i>	関係被害平均	<i>SD</i>	孤独感平均	<i>SD</i>
関係高群	20	5.00	1.38	9.50	1.50	18.3	4.6
外顕高群	26	7.88	1.37	6.19	1.39	15.7	3.1
両高群	34	9.53	1.33	10.56	1.21	19.0	5.0
両低群	46	3.35	0.71	4.67	0.99	15.7	3.1

6.39; $p < .01$), 多重比較の結果, 両高群と関係高群が外顕高群と両低群よりも孤独感が高かった (Table 3). この結果から, 5歳児の場合, 関係性攻撃の被害を受けることが孤独感の高さと関連し, 外顕的攻撃の被害は孤独感の高さと関連しないと考えられる。

研究 2

方 法

社会的行動の査定

観察 日常場面での対象児の社会的行動を測定するために, 自然観察法を用いた観察を行った。観察は第一著者が, 観察対象児の自由遊び時間及び昼食時間をビデオ録画した。期間は, 5月~11月までの約5ヶ月間 (8月は除く) であった。観察時間は, 1名につき10分間×12セットの合計120分間行った。観察中は基本的に幼児との関わりを持つことはなく, 話しかけられたときに応じる程度であった。

観察対象児 研究1で対象とされた年長組3クラスの中から1クラス (平均年齢5歳4ヶ月; 男児28名, 女児13名) を観察対象とした。各クラスターの人数は, 関係高群が3名 (男児0名, 女児3名), 外顕高群が4名 (男児4名, 女児0名), 両高群が4名 (男児3名, 女児1名), 両低群が20名 (男児11名, 女児9名) であった。

観察の記録方法 ビデオ録画された行動は, The Behavior Observation Record (BOR) (Karen, Alice & Charles, 2000) を用いて記録した。BORは, 就学前児の遊びや社会的行動の記録のために開発された観察記録法であり, ターゲット児が従事し

ている行動だけでなく, ターゲット児の行動に対する他児の反応についても同時に記録することができる。また, BORでは, 従来評定されてこなかった相互作用の質的側面も評定することが可能である。例えば, 行動に伴う感情の質を示すために, 明らかにポジティブな表情をした場合 (笑顔・笑うなど) はプラス (+), ネガティブな表情 (怒る・泣くなど) にはマイナス (-), ニュートラルな表情 (無視・無表情・無反応など) にはゼロ (0) を記録する。

相互作用の抽出 相互作用の定義については Karen et al. (2000) と同様に, 他者から働きかけられた場合に対象児がどのような行動及び表情をとったのか, また, 対象児が他者に働きかけた場合に相手がどのような行動及び表情をとったのかをそれぞれ1つの相互作用として数えた。また, 行動カテゴリーに関しては Karen et al. (2000) のカテゴリーを参考に本研究において, ①コメント・質問・勧誘 (例: 「これ貸して?」, 「仲間に入れて?」など), ②指令・制限 (例: 「○○して!」 「○○しちゃダメ!」など), ③外顕的攻撃 (例: 玩具を取ろうとして叩くなど), ④関係性攻撃 (例: 仲間はずれ, 無視するなど) の4つに分類した。

具体的な相互作用の記録方法としては, 観察対象児Aが他児Bに対して何らかの働きかけを行い, それに対するBの反応を相互作用1と数えた。また, 行動のカテゴリーや表情を含めた場合の記録方法としては, 観察対象児Aが他児Bに対して「仲間に入れて」と言い, Bが笑顔で「いいよ」と答えた場合, “Aからの働きかけで下位カテゴリー

①の表情プラス”が1回とカウントする。

【倫理的問題の配慮】

社会的行動の観察の際、攻撃行動が見られた場合には、観察終了後に保育者に報告した。その際、ビデオテープも提出した。また、激しく相手を叩くなどの行為が見られた場合には、その場で観察者が静止させるような介入を行った。

結果・考察

相互作用の抽出

観察されたデータについて、まずはじめに、観察対象児から働きかけたのか、あるいは、観察対象児が働きかけられたのかについて分類した。分類する際の一致率を算出するために3人分のデータをランダムに選び、本研究に無関係な評定者に独立して分類してもらった。その結果、第一著者とのカテゴリー分類の一致率の平均は98.4%という高い数値を得た。その後、不一致箇所は2名で協議した上で決定し、残りのデータについては第一著者が個別に分類した。次に、相互作用の行動カテゴリーを分類する際の一致率を算出するために、上記と同様の手続きを用いて一致率を求めた結果、一致率の平均は96.6%であった。同様に、感情の質（表情）を分類する際の一致率を算出した結果、一致率の平均は94.5%であった。これらの分類についても不一致箇所は2名で協議した上で決定し、残りのデータについては第一著者が個別に分類した。

他者からの働きかけ・他者への働きかけ

対象児が他者からどのような働きかけをされたのか、また、他者に対してどのような働きかけを

したのかについて群ごとの平均頻度及びその比率を算出した (Table 4)。他者からの働きかけの平均頻度の合計及び他者への働きかけの平均頻度の合計について χ^2 検定を用いて4群間で比較した結果、どちらの平均頻度にも偏りは見られなかった ($\chi^2(3)=5.28, \chi^2(3)=7.77$)。この結果は、孤独感が高い両高群や関係高群と孤独感が低い外顯高群や両低群の他者との相互作用頻度に違いが見られないことを示し、孤独感の高さと相互作用量は関連するとは言えないと考えられる。この結果は、相互作用の量的欠如だけが孤独感と関連するとは言いきれないとした先行研究の結果 (Dodge, 1983) を支持するものである。

次に、他者からの働きかけの内容が群間で異なるかのかを検討するため、内容ごとに反応比率を算出し χ^2 検定を用いて群間比較を行った。その結果、①コメント・質問・勧誘、②指令・制限のどちらも反応比率に偏りは見られなかった ($\chi^2(3)=1.53, \chi^2(3)=3.13$)。また、③外顯的攻撃と④関係性攻撃は、反応比率が低かったために統計的分析は行えなかったが、外顯的攻撃は、外顯高群が8.3%、両高群が6.8%、関係高群と両低群が0%行われていた。また、関係性攻撃では、関係高群は3.2%、両高群が5.4%、外顯高群と両低群は0%行われていた。

他者への働きかけの内容が群間で異なるかのかを検討するため、内容ごとに反応比率を算出し χ^2 検定を用いて群間比較を行った。その結果、①コメント・質問・勧誘、②指令・制限のどちらの反応比率にも偏りは見られなかった ($\chi^2(3)=8.19,$

Table 4 他者から働きかけられた内容及び他者に働きかけた内容の群ごとの平均頻度及び比率 (%)

	関係高群		外顯高群		両高群		両低群	
	他者から	他者へ	他者から	他者へ	他者から	他者へ	他者から	他者へ
コメント・質問・勧誘	79.3 (59.2)	61.0 (80.3)	72.3 (66.8)	57.3 (52.8)	60.0 (59.6)	62.0 (57.3)	84.2 (71.2)	70.2 (75.9)
指令・制限	50.3 (37.6)	15.0 (19.7)	27.0 (24.9)	39.3 (36.2)	28.4 (28.2)	32.2 (29.8)	34.0 (28.8)	18.4 (19.9)
外顯的攻撃	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	9.0 (8.3)	12.0 (11.0)	6.8 (6.8)	13.8 (12.8)	0.0 (0.0)	3.3 (3.6)
関係性攻撃	4.3 (3.2)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	5.4 (5.4)	0.2 (0.2)	0.0 (0.0)	0.6 (0.6)
合計【相互作用数】	133.9 (100)	76.0 (100)	108.3 (100)	108.6 (100)	100.6 (100)	108.2 (100)	118.2 (100)	92.5 (100)

$\chi^2(3)=7.05$). ③外顯的攻撃と④関係性攻撃は、反応比率が低かったために統計的分析は行えなかったが、外顯的攻撃は、両高群が12.8%、外顯高群が11.0%、両低群が3.6%、関係高群が0%行っていた。関係性攻撃では、両低群が0.6%、両高群が0.2%、外顯高群と関係高群は0%であった。

行動カテゴリー及び表情を含めた相互作用の比較

他者からの働きかけに対する反応と他者への働きかけに対する反応それぞれについて、4つの下位カテゴリーに分類し、さらにそれを3つの表情に分けて群ごとの平均反応頻度及び反応比率を算出した。反応比率が4群で異なるかどうかを明らかにするために χ^2 検定を行った (Table 5, 6)。

他者からの働きかけに対する対象児の反応の比較 (Table 5)

下位カテゴリー①コメント・質問・勧誘 χ^2 検定の結果、ゼロ反応の比率の偏りが有意であった ($\chi^2(3)=17.50, p<.01$)。多重比較の結果、外顯高群が関係高群や両高群と比べて多かった ($p<.01$)。この結果は、相手からコメントや質問を受けた場合、外顯高群は関係高群や両高群よりも無反応で応じる割合が多いことを意味する。

下位カテゴリー②指令・制限 χ^2 検定の結果、全ての反応において比率の偏りが有意であり (プラス反応 $\chi^2(3)=10.83, p<.05$; マイナス反応 $\chi^2(3)=10.34, p<.05$, ゼロ反応 $\chi^2(3)=18.57, p<.01$)、それぞれの多重比較の結果、プラス反応

は関係高群が外顯高群よりも多く ($p<.01$)、マイナス反応は関係高群が両高群よりも多く ($p<.01$)、ゼロ反応は外顯高群が他の3群よりも少なかった ($p<.05$)。この結果は、相手から指令や制限を受けた場合、関係高群は笑顔で反応したり (事例1参照)、悲しい顔で反応したりする割合が多く (事例2参照)、外顯高群は他の群よりも無反応である割合が少ないことを示している。関係高群の相互作用の詳細について、以下に事例で紹介する。事例1は、相手から指令や制限を受けた場合、関係高群がプラス反応を行った具体例で、事例2はマイナス反応を行った具体例である。

【事例1】 関係高群の女兒Aは他の女兒3名と順番待ちをしている時、「Aちゃんは後ろに回って！」と女兒Bに指令され笑顔で後ろに回る。

【事例2】 昼食時、お弁当を食べるためのグループを作っているとき、関係高群の女兒Cは、女兒Dに「Cちゃん(の席)はあっちでしょ(別のグループを指差して)」と言われ涙ぐむ。

下位カテゴリー③外顯的攻撃と④関係性攻撃は、生起頻度が低かったために統計的な分析は行えなかった。しかし、反応比率を詳細にみると、外顯的攻撃を受けた場合、外顯高群が笑顔で応じた割合が0%、怒って応答したのが15.8% (事例3参照)、無反応が0%であり、両高群は笑顔での反応が0%、怒って応答したのが28.1%、無反応が1.8%であった。関係高群と両低群は外顯的攻撃を受けていなかった。関係性攻撃を受けた場合、関係高群が笑顔や怒って応答したのが0%、無反応

Table 5 他者からの働きかけに対する対象児の平均反応頻度と比率(%)

内容	関係高群			外顯高群			両高群			両低群		
	プラス	マイナス	ゼロ	プラス	マイナス	ゼロ	プラス	マイナス	ゼロ	プラス	マイナス	ゼロ
コメント・質問・勧誘	52.0 (68.2)	6.0 (45.0)	21.3 (48.1)	36.8 (88.0)	27.0 (47.4)	8.5 (89.5)	38.3 (74.7)	7.8 (34.8)	14.0 (51.3)	53.3 (83.2)	16.7 (50.5)	11.3 (62.4)
指令・制限	24.3 (31.8)	7.3 (55.0)	18.7 (42.2)	5.0 (12.0)	21.0 (36.8)	1.0 (10.5)	13.0 (25.3)	6.0 (26.8)	9.5 (34.8)	10.8 (16.8)	16.4 (49.5)	6.8 (37.6)
外顯的攻撃	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	9.0 (15.8)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	6.3 (28.1)	0.5 (1.8)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)
関係性攻撃	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	4.3 (9.7)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	2.3 (10.3)	3.3 (12.1)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)
合計頻度(%)	76.3 (100)	13.3 (100)	44.3 (100)	41.8 (100)	57.0 (100)	9.5 (100)	51.3 (100)	22.4 (100)	27.3 (100)	64.1 (100)	33.1 (100)	18.1 (100)

Table 6 対象児からの働きかけに対する他者の平均反応頻度と比率(%)

内容	関係高群			外顕高群			両高群			両低群		
	プラス	マイナス	ゼロ	プラス	マイナス	ゼロ	プラス	マイナス	ゼロ	プラス	マイナス	ゼロ
コメント・質問・勧誘	22.0 (77.7)	3.7 (68.5)	35.3 (83.5)	29.0 (64.4)	13.3 (38.4)	15.0 (51.7)	16.3 (55.4)	9.3 (39.1)	36.5 (66.0)	42.6 (86.4)	19.9 (68.4)	7.7 (54.6)
指令・制限	6.3 (22.3)	1.7 (31.5)	7.0 (16.5)	16.0 (35.6)	15.3 (44.2)	8.0 (27.6)	9.0 (30.6)	9.5 (39.9)	13.8 (25.0)	6.1 (12.4)	7.7 (26.5)	4.6 (32.6)
外顕的攻撃	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	6.0 (17.3)	6.0 (20.7)	3.8 (12.9)	5.0 (21.0)	5.0 (9.0)	0.6 (1.2)	1.5 (5.2)	1.2 (8.5)
関係性攻撃	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.3 (1.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.6 (4.3)
合計頻度(%)	28.3 (100)	5.4 (100)	42.3 (100)	45.0 (100)	34.6 (100)	29.0 (100)	29.4 (100)	23.8 (100)	55.3 (100)	49.3 (100)	29.1 (100)	14.1 (100)

で応じたのは9.7% (事例4参照), 両高群が笑顔で応じたのは0%, 怒って反応したのは10.3%, 無反応で応じたのは12.1%だった. 外顕高群と両低群は関係性攻撃を受けていなかった.

事例3は, 外顕高群が外顕的攻撃を受けた際, 怒って反応した際の実例で, 事例4は, 関係性攻撃を受けた場合に関係高群が無表情で応じた際の実例である.

【事例3】外顕高群の男児Aが剣を持っていると男児Bがやってきて「これ(剣)をかせ!」と言って叩かれる. するとAはBに叩き返し剣を取り返す.

【事例4】女兒数名がままごと遊びをしている際, 関係高群の女兒Eは女兒数名から「Eちゃんて嫌よね. あっちに行行って欲しいよね」と陰口を言われ, 女兒Eは無表情のまま立ちすくむ.

対象児からの働きかけに対する他者の反応頻度の比較 (Table 6)

下位カテゴリー①コメント・質問・勧誘 χ^2 検定の結果, マイナス反応では比率の偏りが有意であり ($\chi^2(3)=16.70, p<.01$), 多重比較の結果, 関係高群と両低群が外顕高群や両高群よりも多かった. ゼロ反応の比率の偏りも有意であり ($\chi^2(3)=9.78, p<.05$), 多重比較の結果, 関係高群が外顕高群よりも多かった ($p<.01$). この結果は, 相手に対して勧誘や質問を行った場合, 関係高群は怒られたり, 無視されたりする機会が多いことを意味している (事例5参照).

【事例5】関係高群の女兒Fが, 数名で遊ぶ女

児に対して「仲間に入れて」と働きかけるが, 誰も返事をしない. しばらくFは黙ってその場に立っているが, 女兒らは自分達の遊びを続ける.

下位カテゴリー②指令・制限 χ^2 検定の結果, プラス反応で比率に偏りがあり ($\chi^2(3)=3.25, p<.01$), 多重比較の結果, 外顕高群や両高群は両低群よりも多かった. この結果は, 外顕高群や両高群は他児に対して指令や制限を行った場合, 相手から笑顔で応答される機会が多いことを意味する.

また, 下位カテゴリー③外顕的攻撃と④関係性攻撃は, 生起頻度が低かったために統計的な分析は行えなかった. しかし, 反応比率を詳細にみると, 外顕的攻撃を行った場合, 外顕高群が相手に笑顔で応じられる割合は0%, 怒られたのは17.3%, 無反応が20.7%であった. 両高群が笑顔で応じられたのは12.9%, 怒られたのが21.0%, 無反応が9.0%であった. 両低群が笑顔で応じられたのは1.2%, 怒られたのは5.2%, 無反応が8.5%であった. 関係高群は外顕的攻撃を行っていなかった.

関係性攻撃を行った場合, 両高群が相手に笑顔で応じられる割合が1.0%であり, 怒られる・無反応が共に0%であった. 両低群が笑顔で応じられる・怒られる割合が0%であり, 無反応で応じられる割合が4.3%であった. 関係高群や外顕高群は関係性攻撃を行っていなかった.

総合考察

本研究の目的は, 攻撃被害のタイプによって孤

独感に違いが見られるか、さらに、仲間との相互作用の質にどのような違いが見られるのかの2点を明らかにし、幼児の孤独感の低減に対する保育者の適切な働きかけを考察することであった。

攻撃被害に関する性差をみると、研究1では外顯的攻撃被害は男児が女児よりも多いのに対し、関係性攻撃被害は有意な性差は確認されなかった。この結果は、女児は関係性攻撃被害が多いとする先行研究(Crick et al., 1999)の結果と一致しなかった。しかし、研究2の攻撃被害群の人数比をみると、関係高群3名が全て女児であり、特定の女児が関係性攻撃のターゲットとなりやすいことを示した畠山・山崎(2002)の結果と一致している。従って、本研究の結果は、関係性攻撃被害は女児に多いとする先行研究の結果をほぼ支持したものであると言える。

また、研究1では、関係性攻撃の被害を受けた幼児と外顯的攻撃及び関係性攻撃の両方を受けた幼児の孤独感、外顯的攻撃のみを受けた幼児や攻撃被害を受けていない幼児と比較して高いことが示された。この結果は、関係性攻撃の被害が孤独感と関連することを示唆し、外顯的攻撃も関係性攻撃も孤独感とは関連しないことを示したCrick et al. (1999)の結果と一致しなかった。その理由として、Crick et al. (1999)の研究では3歳から5歳までの幼児を対象としていたのに対し、本研究では5歳児のみを対象としていたことが挙げられる。すなわち、幼児期であっても5歳児以降であれば仲間関係の欠如がもたらす孤独感が生起すると考えられる。

また、研究2では、攻撃による被害者の相互作用の内容を量的・質的に分析した結果、関係性攻撃の被害を受けている幼児も、受けていない幼児も相互作用の量に違いが見られず相互作用の質に違いが見られることが示された。関係性攻撃の被害者は、仲間からの関係性攻撃に対して無反応であったり、指令されても笑顔や泣くなどの反応が多い一方で、被害を受けていない幼児は、仲間から

の攻撃や指令に対して反撃することが多かった。このことは、相互作用量の不足と関連する(Ladd, 1983など)と考えられていた孤独感が、実際は相互作用の質と深く関連することを示している。そうであれば、保育者は関係性攻撃の被害者に対し、単に幼児同士と一緒に遊ばせる(相互作用させる)という働きかけ以外にも、関係性攻撃を受けた際には「嫌な気持ちを主張する」などのスキルを身につけるよう支援するといった配慮も、孤独感の低減という観点からは有効であると考えられる。また、外顯的攻撃の被害者は相手から働きかけられた場合、反撃する機会が多かったことから、この群の幼児に対しても反撃するのではなく、言語的な方略などを用いて相手に主張するなどのスキルを獲得させる支援も必要であろう。

ところで、関係性攻撃による被害者は攻撃されたり命令されたりしているにもかかわらず、なぜ笑顔で応じるといった不自然とも取れる行動をしてしまうのであろうか。いじめの被害者は、仲間に対して変に気を遣ったり、おどおどしたりするなどの行動を示すことが明らかにされている(畠山・山崎, 2003; 岡林, 1997)。また、関係性攻撃の加害者と被害者は同一の仲間グループ内に属し、彼らが遊び時間を共有する時間も長い(畠山・磯部・越中・蔡, 2002)こと、関係性攻撃の加害者の仲間内地位は高く被害者の仲間内地位が低い(畠山・山崎, 2002)ことが示されている。本研究において、加害者の要因や被害者の不自然な行動の理由を直接検討していないので断定できないが、被害者は加害者との良好な仲間関係を維持するため、あるいは、仲間はづれを回避しようとしてこのような不自然な行動を取ってしまうのではないだろうか。このような不自然な反応が、さらなる被害を生むといった悪循環に陥る可能性もある。これらの考えに従えば、特定の仲間グループに固執せず仲間関係を広げ、別の仲間と相互作用を行うことによって孤独感が減少する可能性がある。そのため、クラス全体の仲間関係の交流を活

性化させることも保育者の効果的な援助となり得ると考えられる。

引用文献

- Boulton, M., & Underwood, K. 1992 Bully/victim problems among middle school children. *British Journal of Educational Psychology*, **62**, 73-87.
- Cassidy, J., & Asher, S. R. 1992 Loneliness and peer relations in young children. *Child Development*, **63**, 350-365.
- Crick, N. R., Casas, J. F., & Ku, H. 1999 Relational and physical forms of peer victimization in preschool. *Developmental Psychology*, **35**, 376-385.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. 1996 Children's treatment by peers: Victims of relational and overt aggression. *Development and Psychopathology*, **8**, 367-380.
- Dodge, K. A. 1983 Behavior antecedents of peer social status. *Child Development*, **54**, 1386-1399.
- 畠山美穂・山崎 晃 2002 自由遊び場面における幼児の攻撃行動の観察研究：攻撃のタイプと性・仲間グループ内地位との関連 発達心理学研究, **13**, 252-260.
- 畠山美穂・山崎 晃 2003 幼児の攻撃・拒否的行動と保育者の対応に関する研究：参与観察を通して得られたいじめの実態 発達心理学研究, **14**, 284-293.
- 畠山美穂・磯部美良・越中康治・蔡 佳玲 2002 幼稚園女兒にみられる関係性攻撃の被害者の行動特徴に関する研究 — 幼稚園での観察を通して 広島大学教育学部紀要第三部（教育人間科学関連領域）, **51**, 343-349.
- Karen, G. W., Alice, S., & Charles, S. 2000 *Play diagnosis and assessment*. New York: Wiley. Pp. 544-562.
- Ladd, G. W. 1983 Social networks of popular, average, and rejected children in school settings. *Merrill-Palmer Quarterly*, **29**, 283-307.
- 前田健一 1995 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究 教育心理学研究, **43**, 256-265.
- 落合良行 1999 孤独な心 — 淋しい孤独感から明るい孤独感へ サイエンス社
- 岡林美枝 1997 いじめのサインとチェックリスト 今井五郎・嶋崎政男・渡辺邦夫（編）いじめの解明：学校教育相談の理論・実践事例集 第一法規出版, Pp. 3-13.
- Perry, D. G., Kusel, S. J., & Perry, L. C. 1988 Victims of peer aggression. *Developmental Psychology*, **24**, 807-814.
- Peplau, L. A., & Perlman, D. 1982 *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: Wiley.
- Perlman, D., & Peplau, L. A. 1981 Toward a social psychology of loneliness. In R. Gilmour, & S. Duck (Eds.), *Personal relationships: 3. Personal relationships in disorder*. London: Academic Press. 31-56.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山 巖 1993 引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練 — 社会的孤立行動の修正行動療法研究, **19**, 1-12.
- Weiss, R. S. 1973 *Loneliness: The experience of emotional and social isolation*. Cambridge: MIT Press.

—2004. 12. 6 受稿, 2005. 10. 19 受理—

Relational and Overt Forms of Peer Victimization and Loneliness in Young Children

Miho HATAKEYAMA¹ and Akira YAMAZAKI²

¹Tottori Junior Collage

²Graduate School of Education, Hiroshima University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2006, Vol. 14 No. 2, 194-204

The purpose of this study was to assess the association between relational and overt forms of peer victimization and loneliness in 5-year-old children. In Study 1, for 126 children, a teacher rating measure was used to assess peer victimization, and loneliness scale was used to assess children's self-report of feeling of loneliness. For data analysis, the children were divided according to the scores on victimization into four groups: overt victims, overt and relational victims, relational victims, non-victims. Results indicated that relational victims and overt and relational victims were significantly lonelier than overt victims and non-victims. In Study 2, observations were made in classroom and playground during free play periods. Several aspects of their interactive behavior were coded using the categories of BOR. Main results were that relational victims tended to respond in many cases with such an unnatural manner as smile, even when they were aggressed.

Key words: young children, relational forms of victimization, overt forms of victimization, loneliness, BOR